

No.2709

ホボクサイルモンゴル人の仏教信仰に関する人類学的研究

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

那木加甫

本研究の目的は、モンゴル国、ロシア、中国などの国々において、少数派集団として生き残ってきたオイラド・モンゴルの宗教文化の復興のあり方を明らかにすることである。当助成事業の2年目の調査活動においては、カルムイクにおけるオイラド・モンゴル社会の宗教文化の復興を中心に考察を深めた。

1980年代中期にソ連が国内で施行したペレストロイカ政策による民族政策の緩和と、1991年のソ連の解体による社会主義政権の終結といった社会変容の影響をうけて、カルムイク国内で宗教復興を主とする民族伝統的文化の復興が高揚してゆく。こうした時代背景のもとで建設された開祖金寺は今日どのような宗教的、社会的活動を行なっているのか、ということに今回は焦点をあてた。

今回の調査を通して当寺院の建設費用の出所を含む建設過程、僧侶の教育システム、寺院の管理体制や主な収入源、仏像の構成や招来の概要、座の配置、供物・金銭の管理や分配、法要の日程と内容、巡礼者や協力者の概要を含む基本状況を把握することができた。そのうえで、当寺院が主体的に創設したB慈善団体（以下B団体と略す）の活動をも射程に入れた。B団体の事例をみると、団体の創設から援助活動の展開、募金活動、活動に参加するメンバーまでのすべてが、公德を積むという唯一の主題のもとで動いていることが明らかになった。団長のS僧を含む開祖金寺の僧侶の多くは、1959年にダライ・ラマ14世がインドへ亡命した後、インドにおいて再建したチベット仏教大僧院において仏教の勉強をしている。また、カルムイクにおける宗教指導である転生活仏のテロ・トルク・リンポチェもダライ・ラマ14世の側近であるため、開祖金寺の宗教的、社会的活動にダライ・ラマ14世からの影響が大きい。

カルムイク全国の範囲でも、母語、ダンス、民謡、生活用品など伝統文化を復活しようとする目的で創設された様々な団体が数多く存在し、最も活発である。むしろ、こうした団体活動がソ連崩壊後のカルムイク社会における宗教文化の復興を支えていると考えてよい。